

# モード Mode Mode は語る

## 一点物と既製品の間を探る

中野 香織

オートクチュールと既製服を、職人の仕事という観点から見ると、それぞれ長所と短所がある。オートクチュールは注文を受けてつくる一点物で、高度な技術が限界まで詰め込まれる。職人にとっては腕を振るう絶好の機会となり、一回の仕事の価値や収入は大きいですが、次の受注がいつになるか保証はない。

一方で既製服は、量産できる比較的シンプルなデザインが向いており、経験が浅くとも請け負うことができる。リピートもできるので安定した仕事に結びつきやすいが、難度



京都の清水寺を連想させる「ki yomizu」

の高い技術を磨き、発揮する機会は失われていく。

技術を未来へ伝えていくには、両

「未来の骨董」をつくる

者の中間のあり方を探ることが望ましい。そんな視点を伝統工芸の世界に持ち込み、先進的な日本の美の世界観を表現しているのが、伝統技術ディレクターの立川裕大氏だ。

同氏が2023年から手掛けるプロダクトブランド「AMUAMI（編阿弥・あむあみ）」は、同氏の表現を借りれば「未来の骨董」をつくる取り組みだ。箔、漆、螺鈿（らでん）などの素材と、彫刻、染色、轆轤（ろくろ）、切子、組みひもといった伝統技術を自在に掛け合わせる。その作品は、伝統的な日本の思想を内包し

つつ近未来を感じさせる。

たとえば、立体組子による台「ki yomizu（きよみず）」。木工の町、福岡県大川市の職人の技術を生かした作品で、格子状の組子を幾層にも重ね構成されている。一本の釘も使わず木を組み上げた姿は、京都の清水寺の舞台を支える伝統工法「懸造り（かけづくり）」を連想させる。

「清水の舞台からは飛び降りられません、高さ50センチのきよみずなら飛び降りることができます」と立川さん。小さなものをめでる日本の「縮小の美学」にユーモアが加わることで、伝統技術に込められた人間の知恵や心にとしさが生まれ、語りたくなる。技術を未来につなぐ鍵のひとつがこんな情緒だ。